

# 多様性がグローバル化の原点

——「さくらサイエンスプラン」(SSP)で体験する様々な国民性

見習うべきはインド人の臨機応変で柔軟な対応能力。

国立研究開発法人 科学技術振興機構 (JST)

国際連携アドバイザー **西川裕治**

(前 JST インド代表)

## 世界をつなぐ交流プログラム

科学技術振興機構(JST)では、2014年に「さくらサイエンスプラン」(SSP)という事業をスタートした。SSPは日本の大学、高校、研究機関、各種団体、企業などが受け入れ機関となり、アジアを中心とする発展途上国から優秀な若手理系人材を10人程度のグループで日本に1～3週間の短期招へいするプログラムを作成し応募してもらい、優良なプログラムには往復旅費、滞在費などの資金を提供する事業。

SSPの目的は海外の優秀な若手人材が日本の最新の科学技術を知り、日本を好きになり将来の日本との架け橋となってもらうことだ。多くの日本人学生・生徒と交流し、相互に様々な刺激を受けることで日本のグローバル化促進の起爆剤になると確信している。これまでの6年

間でラテンアメリカを含む41の国・地域から3万人を超える人材が訪日している。

同事業の大部分は公募により受け入れ機関が決まるが、JST自体が受け入れ機関となり各国の優秀な高校生を直接招へいする高校生プログラム(SSHP)もある。SSHPでは各国の政府省庁が厳選して派遣する合計1000人の高校生を毎年100人単位、10グループに分けて受け入れ、日本のトップ大学や高校、研究機関などに案内し交流する。プログラムのハイライトは、ノーベル賞受賞者や世界レベルの著名な研究者の話聞く機会、日本の高校などで開催され、日本人高校生も参加する。未来の科学者やエンジニアを目指す高校生にとっては、夢のようなプログラムなのだ。

筆者は2015～18年に初代JSTインド代表としてデリーに駐在し、『インドの科学技術情

勢』の発行にも携わり、インドの多くの高校や大学を訪問した。帰任後もSSHPの実施においては、世界各国からの訪日高校生の案内役としてバスに同乗し、毎年数百人の海外の高校生と接している。これらの経験から、日本人と外国人(特にインド人)との間に様々な違いがあることを感じてきた。



インド・中国・中南米など6カ国からの高校生を同時に招へい最終日の報告会